# 新潟の水辺だより

niigata-mizubenokai report

Vol.97

●編集発行
特定非営利活動法人
新潟水辺の会
●発行日
2021年03月01日


report 01

## 2020新潟の水辺シンポジウム「ガタリンピック鳥屋野潟の夢語り」
## 若者がワクワクする水辺遊・学を考えよう!!

2020年12月5日(土)新潟駅前コープシティ花園ガレッソホールにて「新潟の水辺シンポジウム」を開催しました。新型コロナウイルス感染症対策として定員の削減、受付時の検温と手指消毒、マスクの着用、1時間ごとの換気、国や県の感染対策アプリのダウンロードの案内など細心の注意を払い、45人の方からご参加いただきました。

前半は「水辺の活動報告」。加藤　功(当会副代表)から「信濃川鮭遡上2020報告」と「産業筏の終焉する通船川」、山岸　俊男（当会副代表）から「カワセミ橋が見えるまちづくり報告」が発表されました。

後半は「子どもたちが遊び競い学べる潟の可能性をさぐる」と題したパネルトーク。はじめに、相楽治（当会代表）から「鳥屋野潟がってんプロジェクトの先に見たい景色」と題し、空芯菜水耕栽培、防災環境舟運体験会、がってん丸人力走など「鳥屋野潟がってんプロジェクト2020」の報告と問題提起があり、その後4人のパネリストの皆様からそれぞれの活動報告、当会顧問2名から講評を頂きました。

### ◆問題提起　相楽　治（当会代表）

きっかけは「いつでもカヌーができたらいいのに」という少年の呟き。かつての鳥屋野潟はボートやヨットで賑わっていた。潟に「港」が欲しい。通船川の港は万代高校が日常で利用しているが、栗ノ木川の港は年1回のイベントでしか利用されなかった。他県では「戦略的」に水辺が利用されている。イベント消費型から人づくり・まちづくり生産型の戦略を構築することが必要ではないか。

**イベント消費型から、人づくり、まちづくり生産型へ**

**●潟守ジュニアリーダー育成、潟公園まち戦略**

**里潟の舟港づくり戦略**
**→　4構成条件＋がってん丸母港**
**→　公園カヌー教室**

**舟シェア型プラットフォーム体制戦略**
**→　水辺公園の組織キャンプ社会実験**
**→　里潟エコポイントの社会実験**

### ◆活動報告

**牛腸　昌克さん**
**（新潟市立上所小学校教諭）**

鳥屋野潟は、時間的・空間的・経験的な「ずれ」が子どもたちにとって魅力的。総合学習の狙いは魅力的な「出会い」。潟に関わる大人と出会い、触ったり、味わったりという五感から見方･考え方を変えていく。子どもたちは、楽しんでいる大人をスゴイと思い、実物に触れることで爆発的に興味関心が高まった。もっとやってみたいという気持ちが親にも伝播している。

## ■水辺レポート

**大野　彦栄さん**
**（中央区清五郎自治会会長・鳥屋野潟漁業協同組合理事）**

昔のような活気のある鳥屋野潟にしたい。50～60年前の鳥屋野潟は生活の糧であり、子どもの遊び場だった。高度成長期には観光地化したが、宅地開発で水質悪化。現在は水質も改善し、一本松周辺の整備や子どもたちに潟舟体験などを実施している。自然は人の手を入れないと守れない。治水対策事業にあわせて湖面に接する施設を整備してほしい。

**澁谷　毅さん**
**（新潟市立万代高等学校　端艇部監督）**

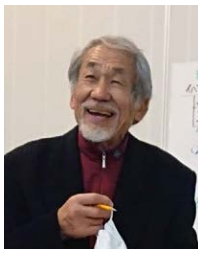
生徒たちは通船川に愛着を持っている。桟橋の役割は非常に大きく、川に対する見方が変わり部員も増えた。「危ない」と言われると、子どもは逆に「なぜ」と行きたがる。親は何が危ないのか知らない。桟橋があることで水面に出て何が危ないか体験できる。桟橋や艇庫の管理を通じて、自分が社会の中でどう生きていくかという動機づけにもなる。

**内藤　敬三さん**
**（TOTO株式会社信越支社）**

「TOTO水環境基金」では、水に関わる環境活動を継続している団体を支援している。社員や家族が鳥屋野潟を体験し、「歩けるんだ」「安全なんだ」と純粋な驚きがあった。驚きこそが魅力の再発見。鳥屋野潟の真ん中から見た景色に感動した。将来は観光船でいつでもだれでも体験できるようになるといい。みんながもっと関わって魅力ある鳥屋野潟に発展してほしい。

**◆講評**

**土方　幹夫**
**（当会顧問・駿河台大学名誉教授）**



子どもの好奇心をうまく引き出すことが大事。子どもの多様性やハンデのサポートも必要。水深や水質など潟の情報を絶えず発信するといい。

**大熊　孝**
**（当会顧問・新潟大学名誉教授）**

鳥屋野潟は新しい段階に突入しつつあるので、若い人たちに頑張ってほしい。自然の中で遊ばせることで、バクテリアやウイルスも含めた生物や人間との関係性が培われる。

**◆会場から**

**肥田野　正明さん（新潟市南商工振興会）**

スポーツ公園のカナールで定期的なカヌー体験を計画している。手ぶらで来ても遊べる鳥屋野潟、遊びを通じて学び一緒に未来を作っていくソフトを作りたい。

**松田　暢夫さん（ながたの森を愛する会）**

公園と潟が連続していない。カナールと「ながたの森」の一体的な活用に期待している。

**浅野　涼太さん（鳥屋野潟公園指定管理者）**

自然との調和を目的に、子どもたちに潟の生き物を教えている。外来種も資源として活用したい

**篠田　昭さん（前新潟市長）**

鳥屋野潟はすごく前進しているけど、人々を引き付ける何かが足りない。子どもたちが鳥屋野潟に行きたいねとなるとますます注目される。

なお、シンポジウムの最後には、2020年4月に亡くなられた元当会顧問C.W.ニコル氏を偲び、生前の映像やスライドを上映したほか、大熊顧問、土方顧問を中心に会場も交えて思い出話に花を咲かせました。

世話人　上杉　知之

report 02

# 鳥屋野潟がってんプロジェクト 2021

2020 年はコロナ禍の中での取組になった。飛躍とまではいかないが、当会の活動の展望を開く年になるはずだった。結果として、厳しい状況下でも小さいが大きな一歩となった。

「里潟」は、地元住民の日常的な利用、実利の中で楽しまれ、自然も維持されてきた。それを学び、現代の『里潟』として、実利とベネフィットになる利用の価値を掘り起こし、その日常化を持続できる事業開発を試行している。

里の自然利用の事業例

### がってん基地を環境潟業基地に

春から、亀田郷土地改良区様のご支援で清五郎潟に空芯菜の水耕栽培ファームが実現し、2 つの小学校の学習フィールドにもなった。水質改善から潟の食材利用、浮き魚礁効果、竹の資源循環、直売、オーナー栽培に学校教育、学校給食、販売学習と広がり、ハネもののパオロカの餌料化で循環モデルができた。

上所小学校の空芯菜栽培の学習

次は、手不足をカバーする、収穫オーナーの拡大と“もったいない栄養分”を活かす水耕栽培ファームの実験と事業化が課題だ。

### 親水と防災が一体の防災環境舟運体験会

水辺の魅力を楽しむ中で、怖さも体感として身に付けることが大切だ。昨年の防災環境舟運体験会は限定参加者の協力で実現できた。期待は、体験をした子供たちが、その楽しさと怖さを、次に体験する子供たちに指導できるように「潟守（かたもり）」ジュニアリーダーに育つことだ。そこで、大熊孝顧問が著書で問題提起した「都市の自然観」※を育てていきたい。

### 青少年による浮島がってん丸の航海

昨秋、9 名でのがってん丸 SUP パドル試走で、約 2 ～ 3 ノット（1.03 ～ 1.54 m /S）の速度が出ることが分かった。

鳥屋野潟湖上でのがってん丸パドル試走

本年は土方幹夫顧問から寄贈された帆走具の助力を得て、子供達が、160ha の湖上航海を計画している。湖上で踊り、ヨガ、合唱、水質やソーラーなどの環境学習の多様なワークショップを行いたい。採れたての空芯菜料理やカフェ時間も楽しみたい。仕上げは、子供たちの湖上キャンプ合宿だ。そこから、一人でも“潟守”ジュニアリーダーが育つことを期待したい。また、サポートする大人たちにとって浮島は、少年時代にときめいた「ひょっこりひょうたん島」冒険になるはずだ。

### ジュニアリーダー養成のカヌー教室に

カヌー教室の実施が検討されている。鳥屋野潟公園利活用の多様化、高度化による、利用者の拡大、重層化と並行して、利用者が指導者に進化できるカヌー教室に育てたい。

代表世話人　相楽　治

※「洪水と水害をとらえなおす - 自然観の転換と川との共生」
2020 年出版：農文協プロダクション：第 74 回毎日出版文化賞受賞

鳥屋野潟がってんプロジェクトは TOTO 水環境基金、（一財）新潟県建設技術センター、（公財）山口育英奨学会からの助成、ゆうちょ エコ・コミュニケーションの寄附により実施しています。

■水辺レポート

report 08

# つうくり沿川まちづくりの会 2020 年度活動レポート
# 地域住民と新潟県立大学生による日常風景の再発見

## 1. はじめに

つうくり沿川まちづくりの会の今年度の活動は、県立大学生が地域の方々と交流している中で、意外に自分の住んでいる地域への愛着心が希薄なことに気づいたことに始まりました。

学生の多くは、この地域以外から通学、県内外からこの地に居を移し通学しています。従ってこの地域の風景を新鮮に感じ、ほっとしたり、素晴らしいと感じ、感性の豊かさが強いものと思われます。

そこで、地域住民と県立大学生による通船川沿川の日常の風景の場所を再発見し、地域の皆さんにその成果をご覧いただき、地域との一層の交流を図りたいとの思いから、皆で地域の宝再発見を目指し活動しました。

## 2.「まち歩き」前の対応

本事業は、新潟市地域活動補助金で実施していることもあり、新型コロナ感染が拡大する中での計画のため、市と協議しながら地域のコミュニティ協議会とも入念な事前打ち合わせを行い実施しました。

撮影まち歩きは、令和 2 年 10 月 31 日（土）に通船川上流域が水の憩い川口公園、中流域が新松崎第二公園にそれぞれ集合することになりました。

当日は、コロナ感染防止のため、参加者の検温と手等の消毒、マスク着用、発症の時の連絡表への記載などをしてから出発しました。

## 3. 通船川中流域のまち歩き

地域の方から説明を聞く県大生

県大生は、地域の方々と歩くのは初めてで、やや緊張気味でしたが、公園を出発して堤防歩道を歩くと間もなく地域の歴史紹介の案内板の前で、説明を受けて質問などのやり取りが始まると、すぐに打ち解け合い、皆が笑顔になっていました。

川沿いに上流域へ向け歩き出して、地域活動の様子を聞きながら歩いると、歩道脇の畑で作業している人にも挨拶を交わしていたら、作業をしている方から「学生さん大根をあげましょう」と、畑から大きな大根を掘り出し手渡され、大喜びでした。

地域との会話から大きな収穫

## 4. 通船川上流域のまち歩き

上流域も中流域と同様にコロナ感染防止対策を済ませてから出発をしました。下流へ向けて歩く前に阿賀野川の洪水敷にて、古阿賀野川から現阿賀野川までの歴史を地域の方から受けました。

地域の方から古阿賀野川の解説

その概要は、約 2000 年前頃、砂丘により阿賀野川河口が塞がれ南下して信濃川と沼垂付近で合流していました。新発田藩は、阿賀野川洪水対策として享保 15 年 (1730) 堤防天端を一部開削して洪水時の水量を海へ直接放流する工事を行いましたが、翌春の融雪出水で施設が破壊され、そこが本流に流れを変えてしまいました。そのため水量を回復するために 5 回の工事が行われ、安永 2 年 (1773) 信濃川への通水に成功しました。

上中流域からの参加者が出会い集合

誕生した通船川は、川幅 30 m、水深 1 m程でした。当時は交通 ( 舟運 ) の大動脈であり、きれいな流れは生活や農業用水として沿川住民の貴重な資源でした。

その後、人口増加、経済の高度成長期に入り国内各地で公害問題が発生し通船川でも汚濁が顕著となりましたが、規制法や市の条例、企業努力により水質の改善が図られてきました。

## 5. まとめ

撮影会の参加者が再発見した場所の写真等の成果は、大型パネル 2 枚等にまとめられ、見る人々に再確認を促す効果など地域への意識改変をもたらすものでした。

下記にて公開展示を行いました。

| 展示会場 | 期間 |
|---|---|
| イオン新潟東店　1F エスカレータ脇 | 1 月 23 日～ 29 日 |
| 下山コミュニティハウス　1F ロビー | 1 月 30 日～ 2 月 5 日 |
| 大形まちづくりセンター　1F ロビー | 2 月 6 日～ 12 日 |
| 東区役所　1F ロビー | 2 月 13 日～ 19 日 |

県大生にとっては、初めての経験であり、地域のいろいろな出来事の経緯や歴史の説明を受け、驚きや地域を深く知る機会と交流が図れたと思います。また企画、交渉、実行する難しさ等、ここでの経験が卒業後の人生の糧になることを期待しています。

地域活動補助金事業は、2 事業が実施され「防災講座」を下記の日程で行います。テーマ :「近年、自然災害がふえているが、なぜか?」～防災・減災を考えよう～

| 会場 | 日時 |
|---|---|
| 下山コミュニティハウス | 3 月 6 日 ( 土 )14:00 ～ 15:30 |
| 大形まちづくりセンター | 3 月 13 日 ( 土 )14:00 ～ 15:30 |

副代表世話人　山岸　俊男

report 04

# 通船川 木材筏の曳航（えいこう）の終了

新潟水辺の会の活動の原点であった「ドブ川再生の通船川」、ここには日本で最後まで残っていた「木材筏の曳航」がありましたが、令和２年で終了しました。

通船川を行く木材筏の曳航

新潟の木材輸入は大正時代に始まり、戦後に新潟港が木材の輸入港に指定されたのに伴い、県営第一貯木場、第二貯木場が建設され、南洋材を使って合板を作る工場が川沿いに作られました。

かつては北越コーポレーション（株）（旧北越製紙（株））さんも通船川を使い、紙パルプの原料の木材を運んでいましたが現在は、原料のチップは陸送にシフトされています。

通船川にある合板製造会社は、新潟合板振興（株）さんと大新合板工業（株）さんがあり、第一貯木場を新潟合板振興（株）さんが使用し、大新合板工業（株）さんが第二貯木場を新潟県から借りて使用していました。

私が新潟水辺の会に入会してからの20年間、水質調査、川ゴミ清掃、ワークショップなどで毎月の如く通船川に通っていましたが、何時行っても川や貯木場には所狭しと木材が置かれ、その木材の多さに驚かされました。

第一貯木場と水路の木材

川ゴミ清掃の大熊先生と安田さん

平成17年、新潟水辺の会がかもめ丸の寄贈を受けて、海洋ゴミにしないための通船川の川ゴミ清掃が始まりました。川ゴミ清掃を始めると、船の水路にも木材が置かれ、その間にゴミが多く、清掃がやりづらく困ったものだと何時も思ったくらい、当時は木材だらけでした。

数年前までほぼ毎月、新潟西港にはパプアニューギニアなどから木材運搬船が入港しますと、クレーンで水面に下ろされます。一見、風呂桶の形で、丸太を引っ掛ける「鉄の歯」と「鉄の顎」を持ち、360度その場で回転できるロータリーボートが下で待ち受け、あっと言う間に木材を岸壁に運びます。

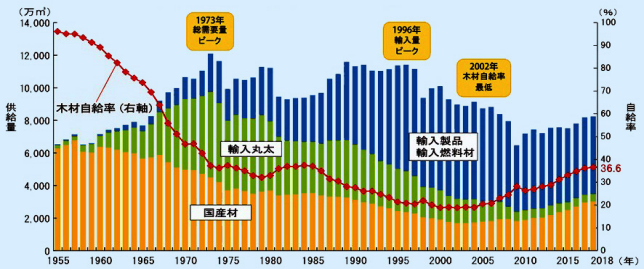
新潟西港での木材下ろし

「川並さん」と呼ばれる専門の技術者さんが、大雨の中でも手際よく丸太の上で番線を使って筏に組む技は、いつ見ても見飽きないものでした。

そして、組まれた筏を貯木場まで運ぶ光景は、玄人集団の力強さの中に職人気質を秘めたもので、「知る人ぞ知る新潟の風物詩」となっていました。

気が付いたらあれ程木材でいっぱいだった第一貯木場が空になり、令和２年８月突然大新合板工業（株）さんの会社清算の記事が業界紙に載りました。

林野庁の出している国内の木材需給表を見ていただくと、輸入丸太の比率は昭和40年代40%を占めていましたが、現在は5%を切っている現状です。理由は、国産針葉樹を増やす国の方針に加えて、海外からの輸入合板との価格競争の激化、原木調達価格の高騰、更には南洋材原木輸出国の輸出禁止や輸出量制限等、合板製造会社が生き残るには厳しいものがあり、会社清算により筏の曳航の終了となったのです。



木材供給量及び木材自給率の推移（林野庁）

通船川は阿賀野川と信濃川を結ぶ重要な川ですが、川を利用している船は９割以上が木材関係で、これが無くなると利用する船は年間数える程になると思われます。川の利用が少なくなると貯木場は無用の長物と観られてしまい、埋めてしまわれる恐れがあります。

平成10年８月４日の集中豪雨の事を覚えている方も多いでしょう。低水路の通船川と貯木場がため池の役割を果たし、あの豪雨被害を最小限で食い止めてくれたのです。だが、貯木場が無かったらどうなっていたでしょう。ポンプ場を増やせば解決する問題ではありません。

川は、治水と利水が共にあって成り立つものです。治水だけの川は人から忘れ去られます。今後、通船川は持続可能な川のあり方を求めて、ドブ川再生の時以上に困難な時代に入る事になるでしょう。万代高校端艇部などの川の水面利用が増えてくれる事を祈っています。

木材筏最後の曳航をYouTubeにアップしましたので右のバーコードよりご覧ください。

副代表世話人　加藤　功

■水辺レポート

report 05

# 寄稿　『洪水と水害をとらえなおす』毎日出版文化賞受賞によせて

2020 年 10 月 23 日、職場に電話がかかってきた。「…毎日新聞ですが、大熊孝先生の『洪水と水害をとらえなおす』が毎日出版文化賞、自然科学部門に決まりました」。本当に？　一通り話を聞いていったん受話器を置いた後、あらためて電話をかけて確認してしまった。「はい。本賞自然科学部門の受賞ですよ」と。じわじわと喜びがこみあげてきた。やった！

贈呈式での記念写真（右から2人目が大熊先生）

さっそく大熊先生に電話を差し上げた。この日は大腸癌の手術から退院されたまさにその日であり、電話をとったのは帰宅直後、椅子にもたれて休んでいたときだという。大熊先生にとってはまさに最高の退院祝いとなった。

「自然現象としての洪水」と「社会現象としての水害」。その両者の関係性を中心として論じられた本書の読みどころは 3 つある。ひとつは 2000 年代に入って増大した大規模水害をどう見るか、そしてそれへの有効な手立ては何なのかが詳述されていること、また、洪水と水害との関係から、日本人の自然観（「民衆の自然観」と「国家の自然観」）について考察されていること、そして、新潟での NPO 活動（新潟水辺の会）から、これからの社会の基盤となる、「都市の自然観」「地域の自然観」の創造を提唱していることである。徹頭徹尾、自身の経験に基づいて書かれているところが、まことに大熊先生の著作らしい。

西垣通氏（東京大学名誉教授･情報学）の選評には「洪水や水害を防止するための知恵が今ほど希求される時は無い。本書はこのための第一級の指南書である。……読み進めながらとりわけ惹（ひ）かれるのは、著者が『国家の自然観』に対して『民衆の自然観』を主張していることだ」とある。自然災害が激甚化する今日、「民衆の自然観」と「国家の自然観」の対比から洪水と水害の本質に迫った内容が評価されたのだ。

本書出版のきっかけは、2019 年 5 月に富山県南砺市で行われた三人委員会哲学塾で大熊先生から「本を出したいと思うのだが…」と話しかけられたことにはじまる。77 歳の誕生日までに原稿を書き上げ、その歳のうちに出版されたいのだという。

原稿は約束通り 8 月の誕生日までにわたしの手元に届いた。しかしその頃わたしは別作品の制作が佳境にあり、腰を据えて原稿に向かうことがなかなかできなかった。大熊先生からは修正原稿が断続的に届き、そしてようやくわたしも本作に集中できるようになったのだが、先生はその間、ほんとうに出版できるのかと不安に感じたこともあったと後から聞いた。

編集のハイライトのひとつが、原稿を書き上げたのち、台風 19 号が襲来し、その被害と治水の関係について急遽原稿が追加されたことである。大熊先生は福島県・阿武隈川と長野県・千曲川の被災現地を訪れている。また八ッ場ダムについての考察も加えられた。

もうひとつのハイライトは、宇沢弘文氏の社会的共通資本論を取り上げた第三部の終章である。「宇沢先生とは『社会的共通資本論としての川』を共同編集でつくったが、もうひとつ言い切れていなことがあって…」とのことで、こちらも原稿が追加された。「自然」という大きな括りでなく、人々が暮らす・条件の異なる「地域の自然」という点から社会的共通資本論を考えるべきだというところまで議論をすすめることができたのは大きな成果だと思っている。

年明けには新型コロナウイルスが広がり始め、制作も思うように進められらくなっていく。あとがきも数度書き換えられ、ようやく 5 月の出版を迎えることができた。ちなみに奥付日付は大熊先生の結婚記念日である（2 刷のそれは大熊先生 78 歳の誕生日）。

本書は、出版前に予約注文を募らせていただいた。篠原修先生の『河川工学者三代は川をどう見てきたのか』に続いて今回も水辺の会のみなさんにほんとうにお世話になった。この場を借りてお礼申し上げたい。そしてあとがきにあるように、大熊先生に執筆をすすめたのは、奥様の宏子さんである。この本の最大の功労者は、宏子さんかもしれない。

「逆転満塁ホームラン」（大熊先生のメールより）。これまで学会ではなかなか評価されることのなかった大熊先生の著作が、このようなかたちで表彰されたことを心から嬉しく思う。

本書は 2 月 5 日付で 3 刷となりました。川との共生から未来を考える人たちに 1 冊でも多く届くことを願っています。今後ともどうかよろしくお願い申し上げます。

（株）農文協プロダクション
『洪水と水害をとらえなおす』編集担当　田口　均

report 08

# 新時代の鳥屋野潟ユートピアに向けて
## 未来を拓く子どもと自然教育

上越高田に流れる儀明川のたもと。スキー伝道師として高田師団にオーストリーから招かれ、この地に宿泊したレルヒ少佐は、毎朝、近所の住民が川面にごみを投げ捨てるのを見て、日本人の行動に呆れた事を、明治日本の想い出に記している。戦後が終え、1960年代から、世界中が経済発展を国是として、時間とお金に追われ、都心の河川は下水と化した。私の育った八王子も例外ではなく、森の湧き水で戯れるオシドリの家族や、山女魚の美しい姿は、今は遠い想い出である。森は住宅地になり、中央高速道や圏央道が騒音と排気ガスを撒き散らしている。経済発展のために自然を犠牲にしてきた歴史が、新型コロナウイルスによって今、全てが変わりつつある。水辺の会は新たなチャンスを与えられ、未来に向けて、美しい鳥屋野潟が蘇る筋道を地域や子ども達と付け実現したい。

### 多様な刺激と発達

子どもは加齢と共に、社会で自立できる身体と、心の準備が仲間や遊びから培われる。しかし、子どもを取り巻く生活や、社会環境が子どもの自由度を奪い去り、子どもは家に閉じこもり委縮している。遊びや体験が大脳辺縁系に刺激し、海馬と偏桃体の記憶や汎用拡大の機能を高め、子どもの成長に大きな影響を及ぼす事など発達刺激の適時性が指摘されて久しい。外界への興味関心の高まる幼児期から小学校学年期が特に重要とされる。初めて見る景色や正体不明な自然現象など、幼児期から小学校低学年の体験や、両親の行動が子ともに影響する。小学校中学年期（ギャングエッジ）はこれらの影響を大きく受け、子どもの将来に発現する可能性も大きい。消極的な反応の子どもの多くは、初の体験で未知の状況を判断するために観察し、指示を待つ。試行するグループと否定するグループ、感動も好奇心も示さない無関心な子どもなど様々である。中学年では、自然への関心や社会生活に興味が高まる。正しい判断の基礎が芽生え　高学年では自己肯定感も強まり、個人差が観られる。又、劣等感や簡単なルールにそって仲間集団が出来、ネット情報での体験や疑似体験が進み、自然活動や外遊びの減少と社会性への関心が現れる。不登校が頻発し、現在の急激な生活変化の時代では個人差がさらに進行すると思われる。

### 教室を離れて自然を活用した教育

フランスのフレネ自然教育は森や林、水辺での自由な活動で生き物の観察や周囲環境に働き駆けての課題学習を放任ではなく、個人に相応しい教育方法を実施している。NPO法人「欅の森自然塾」は、フレネとの情報交換をし、効果を上げている。家庭や子どもの価値観も多様化が進み、従来の集団教育補法では対応できず、バーチャル的な知識体験量の多い世代の子どもの増加と四極化(見せる、見る、楽しむ、無関心・否定）が家庭や学校で進行している。この様な多様な発達段階や身体条件の価値観に応え、成長過程でのフィールドでの直接体験が子どもにとって重要である。

アメリカの野外教育が紹介されたのは1960年頃で、戦後の若者の体力向上を目的に、野外活動が学校教育に導入された。しかし、環境や宗教・社会的な課題は除外された。

1970年以降は幼児向けのプログラムが生まれた。家庭環境に多くの課題（貧困、養育障害、孤立家庭）を抱える社会では、子ども社会の分断を更に進めている。宇宙時代の到来元年と言われる2021年、子どもの夢を拡げ、好奇心を高めるためにも安全管理と言ったリスクマネージメントが重要で、今後の活動での事前確認が必要である。

### 安全教育の視点

コロナ禍後の時代に向けて、新潟水辺の会は大きな躍進を期待されている。多くの実践活動と広範な交流、企業・団体からの支援で、多くの子どもや家族が活動へ参加して来た。不特定多数の水辺活動には絶えずリスクが付きまとうことを認識し、具体的な対策と指導を深めたい。事故の発生には必ず因果関係があり、リスク要因の評価、分析から予知予測を検討し、回避する技術や自己保全能力を高め、更には他者の救助などを参加者に教育し、個々の子どもの発達に即し、好奇心を高められる活動を提示することが重要である。健常者と障碍者の偏らない子どもの参画を十分考慮したフィールドワークプログラムの開発提供も求められている。私達が理想とする自然は、日本の気候風土から育まれ、土地特有の四季折々の味わいのある、美しい水環境（際立った風景　自然水　その川にふさわしい生き物が棲み、川の機能と子どもや隣接住民が安心して遊び集え、外から関心が寄せられ、川の町文化のある事）である。この様な生活環境で育った子どもは、何時かこの美しい自然を身近に置き、そこに棲みたいと願う事を確信する。

スタッフの育成循環や提示プログラムの多様化を積極的に推し進め、歓喜あふれる理想郷を目指して頂きたい。

顧問　土方　幹夫

## 第 10 回毎日地球未来賞の受賞によせて

コロナ禍曇で気が晴れない中、良いニュースです。毎日新聞主催の、毎日地球未来賞の奨励賞を頂きました。

3 月 13 日 ( 土 ) にオンライン授賞報告会です。そこで公開する動画を加藤副代表に作って頂きました。毎日新聞社の毎日地球未来賞の Web サイトをご覧ください。

2020 年 8 月 : 防災環境舟運体験会

エントリーした鳥屋野潟がってんプロジェクトは、潟辺の住民、漁協、学校、研究者などと連携した協働作業チームで進めています。でも、まだ未完の段階なので、受賞にかかるものか不安でした。1 月末、大阪から「奨励賞に受賞です」と電話。年末に大熊顧問から「出してみたら !?」でのエントリーなので、先生の「毎日出版文化賞受賞」の勢いと皆さんの協力、支援での受賞で感謝です。新潟市 12 次産業化優良事例表彰 2018 の奨励賞以来です。

がってんプロジェクトは、潟の再生に留まらず、次世代の子どもたちが新たに、潟の環境価値を生みだし、発展させていくことを期待して、「潟展＝がってん」としました。某放送局の「ガッテン！」のコピーではありません。

昨秋から新年にかけて、「月刊自治研 12 月号」と「月刊下水道 3 月号」に、当会の活動を寄稿し、次の当会活動の変遷概要を書きました。

「水辺の会」は、本年で設立 34 年目。前期 15 年は新潟市内のドブ川通船川の再生、中期 10 年はサケの遡上降下できる大河信濃川の復活、後期の今は、鳥屋野潟の再生･発展と、活動を進化させてきました。この「運動」だけでは水辺文化に育たない。地域に根付く水辺文化に育てるには、住民と学校、事業者、行政などによる連携・協働と、世代をつなぎ持続発展させる共通のゴールが必要で、それを鳥屋野潟では、潟の SDGs「五方よし」として提唱中です。

3 月 5 日には、NPO 法人全国水環境交流会の主催でオンライン研修会「グリーンインフラとしての河北潟の将来を考える」があり、鳥屋野潟の事例を報告します。

2020 年 9 月 : 浮島がってん丸試験航海

TOTO 水環境基金助成の「潟の空芯菜プロジェクト」も最終年。「浮島がってん丸の航海」も土方幹夫顧問寄贈の 7 m マストで帆走前の段階。また、「週末カヌー教室」も鳥屋野潟公園の利活用会議で検討中。1 月末には、「鳥屋野潟 J r リーダー育成プロジェクト」2021-23 を助成申請しました。舟活のスタートに立った気分です。今年も楽しくチャレンジしましょう！

代表世話人　相楽　治

**編集後記 :**

今年の冬は新潟市内も 20cm 以上の雪が積もり、あちらこちらで車の渋滞が見られました。
道路脇には、一週間ほど雪が残っていましたが、私たちの信濃川の水面は青空を反射して、キラキラと輝いています。
コロナ禍の中、団体の活動が制限されて1年近くになりました。
水辺の会など野外活動が出来る団体は良いですが、屋内活動が主体の団体にとっては厳しい状況が続いています。
その中でも「イベントのライブ配信」や「ZOOM 会議」など、活動のスタイルを工夫している団体も出てきています。
世界の状況が厳しい中で、今年は精一杯活動し、輝ける年になること願っています。　編集人 : 森本　利

●発行 : 特定非営利活動法人新潟水辺の会
●事務局　〒 950-2264　新潟市西区みずき野 4-7-15　大熊河川研究室内
Phone　025-264-3191（留守番電話の際は伝言をお願いします。）
●ホームページ　https://niigata-mizubenokai.org　●メール　info@niigata-mizubenokai.org
●会員数　個人会員 84 名、法人会員 5 団体、家族会員 3 組、賛助会員 4 名、顧問3名（2021 年 1 月 31 日現在）